



Title	バークリと知覚の相対性による議論
Author(s)	中谷, 隆雄
Citation	哲学論叢. 1981, 8, p. 51-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66781
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

バークリーと知覚の相対性による議論

中 谷 隆 雄

バークリーの哲学は、「非物質論 (immaterialism)」(iii, 259)⁽¹⁾ という名が示す通り、物質論に対する批判の上に成り立つてゐるが、その物質論批判には、周知の *esse est percipi* 原理の他に、対人立証の議論 (argumentum ad hominem) が使用されることも少なくない。対人立証の議論とは、ロックの定義を借りれば、「或る人に対して、その人自身の原理や譲歩から導かれた帰結を押しつけること」⁽²⁾ と述べる。それはバークリーに於て次の様な形をとる (§18)。

- ① 我々の観念を産出するのに外的物体 (external bodies) を想定することが必要である。
- ② 夢や狂気やそれに類したことで我々が外的物体なしに観念を持つることはあまねく認められている。
- ③ それゆえ、外的物体を想定することは我々の観念の産出に必要ない。

物質論者の説 (①) に対し、物質論者も認めざるをえない事実 (②) を提出することにより望む結論 (③) が得られる。この様に、何らかの説を主張する人に対し、その説に直接関わることなく、その人も承認せざるをえない事

実を提出するだけで反駁を行うのが対人立証の議論⁽⁴⁾と言える。

」の様な仕方の批判は、いかなる前提にも基づいていないという点で、バーカリの物質論批判に於て、ひとつの論理的に独立した要素を成している。ただ、対人立証の議論では、批判すべき説に直接関わることがないので、物質は存在するという説は成立しない、ということが示せるだけで、物質は存在しない、という結論をそれ自体として得る」ことはできない。対人立証の議論で注意すべきことは、」の議論は論敵の不整合を衝く限りのもので、議論による反駁によつて何らか特定の結論を導き出せるものではない」ということである。

II

ところで、第一・第二性質の区分説というのもバーカリにとってひとつの中物論であつた。というのは、その説では、第二性質は心のうちにあるが、第一性質は外的対象 (external objects) のうちにあるとするからである。そして、第一性質が心のうちにあるのは、その内容がそれを知覚する人間あるいは感官 (senses) に相対的であるゆえとやれている。例えば熱が心のうちにある」とは次の様に示される〔知覚の相対性による議論 (the argument from the relativity of perception) 〕。

- ①ひえた右手とあたたまつた左手を同時に同じぬるま湯に入れたとき、右手が暖かく左手が冷たく感じられる」とがある（知覚の相対性）。
- ②外的対象の性質が同時に相異つた内容を持つのは不合理である。
- ③それゆえ、熱は心のうちに存在しなくてはならない。

他の第一性質についても知覚の相対性という事実があり、同様の議論でそれらが心のうちにあることが示される。その結果、第一性質と第一性質の区分が正当化されるという。その様な第一・第二性質の区分説をバークリーは『原理論』で攻撃する。

「さらに、甘さは本当は美味な事物のうちにないことは証明されている。なぜなら、熱のある場合とか、その他
の仕方で損なわれた味覚の場合には、事物が変わらないままで、甘さが苦さに変わっているからである。」(§14)
「要するに、色や味が心のうちにのみ存在することを明白に証明すると考えられている諸議論を誰かに考察させてみよ。そうすれば、その人は延長、形、そして運動について同じ事柄を証明するのにそれらが等しい力で用いられるを見出すであろう。」(§15)

知覚の相対性という事実は第一性質についてもあり、知覚の相対性ゆえに第二性質が心のうちに存在するとされ
ながら、同じ理由で第一性質も心のうちに存在しなくてはならない。⁽⁶⁾ というのがバークリーの言い分である。バークリーの
この批判は、知覚の相対性による議論そのものに直接関わることなく、ただ、第一・第二性質の区分を主張する者たち
が承認せざるをえない事実—第一性質に於ける知覚の相対性という事実—を提出することにより、第二性質のみ心
のうちに存在するという説は成立しないことを示しているにすぎないという点で、対人立証の議論と言える。バーク
リは、ここでは議論の性格を把握して、その様な論法は「延長や色が外的対象のうちにないということを（つまり、
心のうちにあるということを）証明する程のものではなく、それが対象の眞の延長か色かを我々は感官によつては決
めることができない」ということを証明するにすぎない」（括弧内筆者）(§15) と説明している。従つて、右の批判によつて、第一性質も、第一性質と共に、心のうちにある、と結論づけられているわけではない。第一・第二性質の区

分を主張する者は、自身の論法即ち知覚の相対性による議論を有効なものとみなせば、両性質共心のうちにあることを自ら認めてしまうことになるといふことが指摘されているにすぎない。

」の様な第一・第二性質の区分説に対するバークリーの批判について二つの問題がある。

三

ひとつの問題はロックに関連したものである。つまり、第一・第二性質の区分に対するバークリーの批判はロックに向かっているとされることが多いのであるが、もしそうだとすれば、すでにジャクソン⁽⁷⁾によって指摘されている様に、バークリーは明らかにロックの第一・第二性質を正しく把握しておらず、従つて、批判は的外れに終わっていることになる。

ロックの「観念」というのは、「心が自分自身のうちに知覚するもの、あるいは知覚や思惟や知性の直接対象」⁽⁸⁾であり、定義という面のみから言えば、バークリーと変わりない。しかし、ロックの「性質」というのは、観念を「我々の心のうちに産出する力能(Power)」である。だから、ロックの言う「性質」は、その役割から言って、知覚されるものではない。確かにロックは次の様に知覚の相対性に言及している。

「観念がかように区別され理解されると、いかにして同じ水が同時に一方の手に冷たさの観念を、そして他方の手に熱さの観念を産出するか理解できよう。それに対し、もしそれらの観念が本当に水の中にあるとすれば、同じ水が同時に熱くかつ冷たいということは不可能である。というのは、我々の手のうちにある暖かさが我々の神経あるいは動物精気の微小分子の或る種或る度合の運動にすぎないと我々が想像するなら、いかにして同じ水が

同時に一方の手に熱さの感覚を、他方の手に冷たさの感覚を産出することが可能か理解できる。」

しかし、ここでは、知覚の相対性は、第一・第二性質の区分を正当化しようとする議論ではなく、逆に、第一・第二性質という概念によつて説明されるべき事実として言及されているとみるのが自然である。」の「」とは、ロックの第一・第二性質の背景にある「粒子説(the corpuscularian Hypothesis)⁽¹⁾」を考慮すれば理解できる。第二性質は、「様々に運動し、様々な形、かさ、数の分子(Particles)」が我々の感官を「感触して(affecting)⁽²⁾」我々のうちに観念を産出することによつて知られる。そして熱さというのは、「我々の神経の微小分子あるいは動物精氣の或る種或る度合の運動にすぎない」という。とすれば、相異つた暖かさの両手に対し、その中間の暖かさが及ぼす結果というのは、より高い度合の分子運動のあたたまつた手とより低い度合の分子運動のひえた手に対し、その中間の度合の分子運動が及ぼす結果として説明される。即ち、ぬるま湯の分子運動はあたたまつた手の分子運動を低下させ、ひえた手の分子運動を増大させることによつて、結果として、前者につめたく、後者に暖かく感じさせることになる。この様に、ここでは、あくまで第一・第二性質による説明の例として知覚の相対性が引き合いに出されてゐる様に思える。知覚の相対性によつて第一・第二性質の区分を正当化している⁽³⁾という具合にロックのテキストを読み取るのはきわめて困難である。⁽⁴⁾もしそう読み取るなら、ロックは知覚されえない性質の区分を知覚の相対性によつて正当化していると考えねばならないことになる。

いわば、ロックが知覚を、知覚する人間の外側に立つて説明しようとして第一・第二性質という概念を提出しているのに対し、バークリーはあくまで自分自身知覚する人間として第一・第二性質について考察している。視覚と触覚の「兩感官に共通な或る觀念がある」という考え方から「第一性質と第二性質の区分が生じた」(T.V.E.E. §15)とバーク

りが言うとも、そのことが如実に現れている。第一・第二性質は、ロックにとっては知覚を説明する概念であるのに對し、バークリーにとってはあくまで知覚の対象である。それゆえにバークリーはロックが正当化を行つてゐるに思へなかつた。ただ、バークリー的解釈を許す様なあいまいさがロックの記述にあつたことも確かである。第一性質による観念が物体の「類似物 (Resemblance)⁽¹⁸⁾」であると/or れてゐることは、第一性質が知覚可能であるかの様に思われる。また、色、音、におい、味という語が第一性質を意味したり、その観念を意味したりしてゐるという事実もある。ロック自身、「観念が事物そのもののうちにあると、時に私が言うとすれば、それらを我々のうちに産出する様々な性質が対象のうちにあると理解されたい」と述べ、自らのあいまいさを認めさせている。⁽¹⁹⁾

しかし、「バークリーが単にロックを反駁してゐたといふのは自明なことではない」と言つ注釈家もいる。⁽²⁰⁾ そしてだとすれば、バークリーがロックを誤解してゐるとか、批判が的外れであるとか考えるのは見当違ひといふことになる。バークリーの批判対象が単にロックではないという確証は見出し難いが、明らかなのは、『原理論』序論の抽象観念説批判では『人間知性論』から直接引用されているが、第一・第二性質批判にはその様な引用もなく、ロックの名も挙がつていないことである。バークリーの記述からは、第一・第二性質の区分説には複数の支持者が存在するといふ以上のこととは読み取れない。用語法が類似していること、同一の例(同じ物体が一方の手に冷たく他方の手に暖かい) (§14) を使用してゐること、そして『哲学評註』の該当箇所 (76, 78, 112, 326, 534) でロックあるいは『人間知性論』に言及していることからして、批判対象が単にロックでないと言いつ切れるものではないが、右の事実は留意しておくべきだと思う。

10

第一・第二性質に対するバークリーの批判についてもうひとつ問題がある。『原理論』(§315)でバークリーが知覚の相対性による議論に対して不満を表明しているというのは既述の通りであるが、『第一対話』ではバークリーの代弁者フイロナスが物質論者ハイラスに対し、第二性質が外的対象のうちにはないことを、さらには第一性質が外的対象のうちにはないことを知覚の相対性による議論で証明しようとしている様に思えるからである。

「フィロナス 人を必然的に不合理へ導く諸原理が真でありうるか。

ハイラス 疑いなくそれは真ではありえない。

フィロナス 同じ事物が同時に冷たくて暖かいと考えることは不合理ではないか。

ハイラス そうだ。

フィロナス 今、あなたの一方の手が暖かく、そして他方の手が冷たくて、それらが両方同時に中間状態にある同じ器の水に入れられると想定しよう。水は一方の手に冷たく、そして他方の手に暖かく思えないだろうか。

ハイラス そうなるだろう。

ハイラス そう思えることを認める。
フィロナス それゆえ我々はあなたの自身の諸原理によって、それが本当に同時に冷たくて暖かいと結論づけるべきではないか。つまり、あはた自身承認するところに従つて、不合理を信じているとすべきではないか。

フイロナス 従つて、いかなる眞の原理も不合理に導かないことをあなたは認めているのだから、諸原理そのもの

のが偽なのだ。」(i, 178-9)、「味覚 (i, 180)⁽²⁴⁾」にぬる (i, 180-1)、「色 (i, 184-6)」、「延長・形 (i, 189)」、「運動 (i, 190)⁽²⁵⁾」、「固性 (i, 191)」

一見したところ、『第一対話』では知覚の相対性による議論が有効だと考えられていて、『原理論』の見解と不整合である様に思える。

『第一対話』の議論も『原理論』と同様対人立証の議論であるとする考え方⁽²⁶⁾がある。しかし、ティプトンの指摘する様に、知覚の相対性による議論を第一性質について使用し、かつそれを第一性質へ拡張しているのはハイラスではなくフィロナスである。A（第二性質についての知覚の相対性による議論）を主張するならB（第一性質についての同じ議論）を受け入れよ、と言うのと、AとBと共に受け入れよ、と言うのは異なる。対人立証の議論は前者であり、『第一対話』で行われているのは後者である。

ティプトンは『第一対話』と『原理論』各々のコンテキストの相違に着目する⁽²⁷⁾ことによつて、両者の間の不整合が見かけのものであることを示そうとする。バークリイは『原理論』では「知覚されない性質 (unperceived qualities)⁽²⁸⁾」が外的対象のうちにならないことが示されなければならないので、知覚の相対性による議論では不充分だと思つたが、『第一対話』では「知覚される性質 (perceived qualities)」が心のうちにあることを示せればよいのでそれを使つた、といつてゐる。ティプトンによれば、知覚の相対性による議論は「延長や色が外的対象のうちにならぬ」とを証明する程のものではなく (doth not so much prove that there is no extension or colour in an outward object,)」⁽²⁹⁾ (§15) とバークリイが言うべき、「延長や色」は知覚されない性質を意味するが、「程のものではなく (not so much)」は全くの否定を意味しない。だから、知覚の相対性による議論は知覚される性質についてはなお証明力を持つと見る

「これがでも、その証明力をバークリーは『第一対話』で發揮させてくるところ。しかし、右の句には、「これが対象の眞の延長か色かを我々は感官によつては決める」(i)がどちらか(?)とを証明するにすれど(as that we do not know by senses which is the true extension or colour of the object.)」⁽²³⁾ とこう節が続いていた。」の「延長か色か」は、先行のものとは異なり、知覚される性質を意味してゐると言へなくてはならない。そうしなければ節全体が有意味とならないからである。文全体を考慮すれば、その様に解釈する」とは、不可能ではないにしても、不自然の様に思える。

「いや、『第一対話』の方の議論を別の角度から眺め、(i)によつて問題をとらえ直してみた。

『対話』では一貫して物質論批判が展開されてゐるが、注意しなくてはならないのは、各々のコントキストで「⁽²⁴⁾」の意味の物質が批判されているのかどうか」とである。バークリーの「物質(matter)」は、究極的には、知覚されずには存在するものを意味すると言へるが、『対話』の内容と云ふのは、ハイラスが「物質」の意味を次々と変え、それをハイラスが批判して行くこと、形になつておらず、「物質」の意味としては、「直接対象(immediate objects)」、「原型(archetypes)」、「道具(instruments)」、「機会因(occasions)」、「或る物一般(something in general)」⁽²⁵⁾ う様なものがある(i, 223)。知覚の相対性による議論の批判対象となつてゐるのは、順序からいへば、やへと議論の性格からして、明らかに知覚の「直接対象」としての物質である。該当するコントキストで、非可視的性質について「論争する」のは私の仕事ではな」(i, 185) ハイラスが言明してゐるところからもそれは言へる。そして、知覚の相対性による議論というのは諸性質が外的対象のうちにはないことを証明するものであり、そしてその限りのものだから、少なくとも「」では物質は性質の集合であつてそれ以上のものであつてはならない。

また、知覚の相対性による議論では、諸性質が外的対象のうちにはないのは、ひとつの対象を成す性質が感官に相對的な様々の内容を同時に持つことが不合理であるゆえとされているが、この論法を完全に成立させようとすれば、外的対象のうちにあるいかなる性質（いわば determinables）も各々決まつた内容（いわば determinates）を持つ、という前提が必要である。ぬるま湯といふ対象の性質「熱」は決まつた暖かさである、という前提があつてはじめて、同一のぬるま湯が一方の手に暖かく他方の手に冷たいことが不合理となる。知覚の相対性による議論を行つてゐるフィロナスとハイラスはこの前提を当然のことと承知していなくてはならない。「感官にどんな度合の熱を知覚しようともそれをひき起こす同じものが対象のうちにある」とを我々は確信している」(i, 175) というハイラスの言明にもそれは確認できると思つ。(cf. i, 185, 186; P.C. 76)

要するに、『第一対話』の知覚の相対性による議論の批判対象となつてゐるのは、直接に知覚される性質の集合であつて、各性質の内容が一定である様な物質、ということになる。『第一対話』では、あくまでその様な特定の物質が批判対象であるといふ前提で、諸性質が外的対象のうちにはないといふ結論が述べられてゐると言える。従つて、ここでは、特定の物質概念が不合理に陥らざるをえないことが示されてゐるにすぎず、諸性質が外的対象のうちにはないといふ結論が無条件に得られているわけではないと思う。もしそうであれば、バークリイにとって外的対象と心はいわばただ一つの「場所」⁽³²⁾ のだから (§ 67)、諸性質は心のうちにある。とポジティブに明言されていてもよいはずである。ポジティブな表現も見られなくはない (i, 188) が、コンテキストから、それが「証明」の結論であるとは読み取り難い。⁽³³⁾

むしろ、忘れてならないのは、ハイラスの「諸原理が懷疑論へ導かれるのを示す」のが「私の目的」であつた (i, 206)、

という『第一対話』終末部でのフィロナスの発言であろう。懷疑論とは、バークリイによれば、あらゆる事柄について肯定か否定か「未決定(suspense)」(i, 173)であることを意味する。だから、『第一対話』の知覚の相対性による議論は、基本的に、知覚の直接対象として物質という概念を持つハイラスが諸性質について肯定も否定もできなくなつてしまつることを示すためのものであることになる。⁽³⁴⁾

『原理論』(1710.5) の副題—「い」で、諸学に於ける誤りと困難の主たる原因が懷疑論、無神論及び無宗教の根柢と共に探究される—から分かる様に、懷疑論はバークリ自ら最も反対するもののひとつであった。しかし、パーシヴァル (Percival) の手紙⁽³⁵⁾ (1710.9.6) でバークリは、「原理論」に与えられた二つの批難のうちのひとつに、性急な人々がバークリを「懷疑論者と混同しがちである」とを挙げている。そして『対話』(1713) は『原理論』の内容を「より明晰にそして充分に論じる」(Preface) ために著された。これらの事実を考慮に入れると、『第一対話』における知覚の相対性による議論が右の如き性格であることをより確かに主張できるであろう。

結局、『第一対話』では知覚の相対性による議論が、懷疑論につながる特定の物質に適用されているといつゝに着目すれば、『第一対話』でも『原理論』と同様、バークリは知覚の相対性による議論が無条件に有効であるとは信じていないとみる」とがである。

ところで、バークリは、知覚の相対性による議論に対し不満を示しながら、それに代わる方法を提出していない。大まかに言えば、バークリは存在者の三項図式（物質—観念—心）から、esse est percipi により「知覚されずに存在する」物質を消去し、観念と心だけを残す。そして、りんご、石、樹木、本という事物(thing) は観念の集合とされるので、従来事物を構成する役割を担ってきた「性質」は当然の様に観念と同一視される。そして、観念は三項図

式に於て「心のうちにある」という特性を持つていたが、それは依然残されているので、バークリーは性質が心のうちにあることの証明を必要としないのである。換言すれば、esse est percipi により物質を消去する段階で「証明」は済んでしまっている。

バークリーが著作を公けに⁽³⁶⁾するまでの思考過程が記されてゐる『哲学論叢』をみると、当初、知覚の相対性による議論はバークリーにとってひとつの有効な議論であつた様である(20, 63)。「しかし」 esse est percipi が「発見」される(279)頃には、いの議論に対しても否定的な評価が下⁽³⁷⁾れてゐる(265, 363)。「しかし」 esse est percipi の「発見」が知覚の相対性による議論を不要にしてくることを見て取れないか。

五

もはやバークリーにとって知覚の相対性による議論は本質的でないと言わざるをえないが、知覚の相対性といふ事実はなお意義を持つ。知覚の相対性による議論に不満が示される際、その様な論法は「どれが対象の眞の(true)延長か色かを我々は感官によつては決める」とがきなどといふことを証明するにすぎない(§15)と述べられていたが、それは取りも直さず、感官によつて眞の延長や色を決めることができないことをバークリーが認めてしまつたのである。即ちバークリーは、各性質の様々の特殊な内容のうちのどれかを true としてそれに特別な地位を与えるといふことを拒む。バークリーにとって、もうそくの光で見る色が apparent で、太陽のゆきで見る色が true 、といふのではなく。両者は対等である。そして、両者が共に apparent か true かは問題ではなく、等しく感官の観念であるといふ意味で real である(§36)。りんだけが肝要なのである。いの様な思想をバークリーは特に大きめ、形と云う第一性質

に於て徹底させて行く。

例えば、四角くて大きな建物が遠くから小さくて円い塔に見えるとする (Aclci. IV §§8, 9)。普通、四角くて大きな建物が true で、小さくて円い塔が apparent だと考える。ベーカリには true—apparent の区別はない。「なぜ遠い距離で見られた大きさではなく近い距離で見られた大きさが眞の大きさかみなれどやうやうのか。」(P.C.311) 形についても同様である。だから、小さくて円い塔も四角くて大きな建物と等しく real であるにじるある。小さくて円い塔を見て「ふと見、四角くて大きな建物が遠くからそう見えてくる」と「ハのではなし。そのふと見、我々は四角くて大きな建物とは全く別個の小さくて円い塔を知覚してくるのである。四角くて大きな建物と小さくて円い塔はひとつの対象の一いつの姿ではなく、互に独立した一つの別個の対象なのである。従つて、もし知覚者が前進して行く ⁽³³⁾ とすれば、その間「次々と続く可視諸対象の連続した系列 (a continued series of visible objects succeeding each other)」(i, 201) が知覚されるに至る。そして視覚(sight)だけにじる語えば、小さくて円い塔が、小さくて四角い建物より知覚者から離れてくることにはない。小さくて円い塔は距離と何ら必然的関係はない。そもそも視覚対象のうちに距離との必然的関係を示すものはない。距離は「本来触覚に属する (properly belongs to touch)」(N.T.V. §50) のであり、視覚によつて直接に知覚するに至らざるもの。ただ過去に於ける視覚と触覚の「習慣的結合 (a habitual connexion)」(op.cit. §147) によつて視覚対象が距離を示唆 (suggest) する様になつてゐるにやうやうなこ。最もいり口で「一ヶつは自由の説した意味での抽象 (abstraction) (intro. §10) へまへ手続をなす視覚対象と「習慣や経験 (custom and experience)」(N.T.V. §26) の間に大抵に行使するにじるにじる、視覚の固有対象 (proper objects) は「色の多様 (diversity of colours)」のみであり (op.cit. §158)、距離を含まないことを示

そつとしている。

「離れた」対象を見てはいない」と示そうとしたのが『視覚新論』であり、そしてバークリ自身その成果が非物質論にとって必要と考えてゐる」とは『原理論』(§§ 42-44) あるいは『対話』(i, 201-2) に明らかである。なぜ必要なのか。物質を消去しながらもバークリは依然観念が心のうちにあると前提しているのであるから、観念の集合たる「事物」も心のうちにあることになる。しかし、「事物は心のうちにある」という命題が「観念は心のうちにある」という命題と同じ容易さで受け入れられるとは思えない。⁽³⁹⁾そこで、我々は「離れた」事物を見ているのではないと考えることが、「事物は心のうちにある」という命題に伴ういわば心理的抵抗を軽くする役割を果たすことになる。これが非物質論に対する『視覚新論』の役割ではないか。バークリは第一性質の知覚の相対性に於て視覚対象から「習慣や経験」を抽象するという手続きにより、我々は「離れた」事物を見てはいないとし、そしてそのことによつて非物質論の心理的確証を得ようとしている。知覚の相対性という事実は、バークリにとつて、物質論批判の論理的な手段として意義があるのでなく、むしろ、特に第一性質に於ける知覚の相対性が物質論批判の結果を心理的に基礎づけようとすると實際に重要な役割を果たしていると言えるであろう。

六

バークリ自身『原理論』(§ 44) で認めていた様に、『視覚新論』では触覚対象が心の外にあると仮定されていた。⁽⁴¹⁾だから、そこで示されたのは、事物を構成するもののうちの視覚的要素が心のうちに存在するといふ」とのみである」となる。触覚対象も心のうちに存在するというのがバークリの本意である様だが、そのことはいかにして可能な

のか。それが示されなくては、事物が心のうちにあるという心理的確証は不充分なままである。その辺のバークリーの自覚は全く明確ではない。しかし、それ以前の問題、視覚のレベルの問題すでにバークリーは自ら破綻を露呈している様に思える。延長がいかにして心のうちに存在しうるのかといふ問い合わせに対し、『原理論』(§49)では、「様相とか属性という仕方ではなく、観念という仕方でのみ (only by way of ideas)」心のうちに存在すると弁明されている。しかし、それで、いかにして延長が広がりのないもののうちに存在しうるのかという問い合わせに対する答えとなるであろうか。また『原理論』の同じ節に、「延長が心のうちにあるからと言つて魂や心が広がつてることにならないのは、色が心のうちにあって他のどにもないとあまねく認められているから」と言つて心が赤いとか青いとかならないのと同じである」ともある。これも対人立証の議論であるが、(1)ではバークリーは議論の性格を把握していない。色が心のうちにあつても心が赤いことにはならないといふとまで示されなくては、心が広がつていて必要はないといふ結論それ自体は得られないからである。同じ問い合わせに対して、『対話』に至つては、「心のうちに存在する」とふう語句は単に「知覚する」という意味であつて「全く文字通りに (in the gross literal sense)」とられてはならない (iii, 250)、と逃れる。しかし、「心の外にある」即「離れてくる」という前提 (N.T.V. §41; Alci. IV §9) のもとに、視覚対象が離れてはいないと示そうとしたのが『視覚新論』ではなかつたか。⁽⁴²⁾ 非物質論的心理的障害のひとつ、「距離」に於ては、第一性質の知覚の相対性を基礎にその解決を試みることができたが、「広がり」の問題に至つて試みは頓座している様に思える。『視覚新論』を非物質論への心理学的な準備とみれば、それは後の発展をみなかつた仕事と言える。無論、『視覚新論』の意義は非物質論への準備に尽きるものではない。

注

- (1) 使用したテキストは、『視覚新論 (An Essay Towards a New Theory of Vision)』(N.T.V. ジャッピ)、『人間知識の諸原理に關する論文 (A Treatise Concerning the Principles of Human Knowledge)』(大槻春彦訳『人知原理論』)、堺波文庫、一九五八年) (『原理論』 ジャッピ)、『ヘーメルトヘロペシルの対話 (Three Dialogues Between Hyles and Philonous)』 (『対話』 ジャッピ)、『アルシフォン (Alciphron)』 (Alci. ジャッピ)、『視覚論弁明 (The Theory of Vision or Visual Language Shewing the Immediate Present and Providence of a Deity) Vindicated and Explained (T.V.E. ジャッピ)』、『新形論 論 (Philosophical Commentaries)』 (P.C. ジャッピ)等は A.A.Luce and T.E.Jessop (eds.), *The Works of George Berkeley* (London, 1949-58) (Works ジャッピ) 上巻に於いた。『原理論』 ジャッピは書名を省く。前半は編の論考、後者は対話の論考であると記した。
- (2) John Locke, *An Essay Concerning Human Understanding*, ed. P.H. Nidditch (Oxford, 1975) (大槻春彦『人間知性論』堺波文庫、全四冊、一九七一—一九七二年、IV.xvii.21.)
- (3) 想像の觀念 (§30) と異なり、夢や狂氣の觀念は、やがて虚偽となるが、感覚の觀念は「出生してから自然でなければ、死んでからも存在する」のである。
- (4) 「(lively and natural)」 あり、「が、ただ繼起的な並び方が違う (iii, 235)」、「べークリーは著者である。J.F. Bennett, *Lock, Berkeley, Hume: Central Themes* (Oxford, 1971), p.126.
- (5) 対人立説の議論は後述のとおりである。
- (6) 「(6)」の様なやつ方せしハーネー・ペイエ (Pierre Bayle) の論難である。ペイエは「カナダの指摘をもとに」(p.25)。
- R.H. Popkin, 'Berkeley and pyrrhonism', in C.M. Turbayne (ed.), *A Treatise Concerning the Principles of Human Knowledge with Critical Essays* (New York, 1970) (orig. *Review of Metaphysics*, Vol.5, 1951); P.D. Cummins, 'Perceptual relativity and ideas in the mind', *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol.24, 1963.
- (7) R. Jackson, 'Locke's distinction between primary and secondary qualities', in C.B. Martin and D.M. Armstrong (eds.), *Locke and Berkeley* (London, 1968) (orig. *Mind*, Vol. 38, 1929).
- (8) Locke, ibid., II.viii.8.

- (9) Locke, *ibid.*, II, viii, 21.
- (10) P. Alexander, 'Boyle and Locke on primary and secondary qualities', in I. C. Tipton (ed.), *Locke on Human Understanding* (Oxford, 1977) (orig. *Ratio*, Vol. 16, 1974), p70; J. L. Mackie, *Problems From Locke* (Oxford, 1976), p23.
- (11) Locke, *ibid.*, IV viii, 16.
- (12) Locke, *ibid.*, II, viii, 13.
- (13) 歴史的にいへば、我々は常に「第一・第二」の性質の区別を出発した者は現れだらぬる。しかし、我々は示唆してゐる。
- Cummins, *ibid.*, pp20-45.
- (14) ロックは第一・性質に於ける知覚の相対性を認めた（Locke, *ibid.*, II, xxviii, 12）が、近代性質家もこれ。
- M. Mandelbaum, *Philosophy, Science, and Sense Perception* (Baltimore, 1964), pp18-19.
- (15) ウールバースの指摘する様に、我々の感覚が充分に織り込まれて眞實されたものか否か、我々がしかるべき感覚を欠いて、それをより知覚されねばならぬのか理由もさへなし。R. S. Woolhouse, *Locke's Philosophy of Science and Knowledge* (Oxford, 1971), p112. しかし、「知覚のウール原理 (the veil of perception doctrine)」を述べたるものは確かである。
- I. C. Tipton, *Berkeley: the Philosophy of Immaterialism* (London, 1974), p358.
- (16) 倒立像の問題 (N. T. V. §116) にへて、それが體れる。
- (17) 「我々の感覚が、粒子の形態、數、運動、そして大なるか小なるかの力説の結果であるとするのは確實に偽でないとはなんなく」 (§25)、ロックの第一・第二性質に類した概念を批判されてはいる。
- (18) Locke, *ibid.*, II, viii, 15. of Bennett, *ibid.*, pp118-119; Mandelbaum, *ibid.*, pp17-18, pp21-22.
- (19) Tipton (ed.), *ibid.*, Editor's Introduction p8. ホール (R. Boyle) もロックが色や味などを「性質」としたのは「日常の慣用」に不適切とし、向かねばならぬ「彼の欲求の如き」である、とのトマス・ホールは指摘している (Tipton, *ibid.*, p31)
- (20) Lock, *ibid.*, II, viii, 8.
- (21) H. M. Bracken, *Berkeley* (London, 1974), p53.

- (22) プラッケハせんぬ「ベーハリがペールの議論を知つてゐたる」を我々は知つてゐる「と云ふ理由を挙げてゐる (Bracken, ibid., p53)。

(23) Locke, ibid., II, viii, 21.

(24) Jessop, *Works*, Vol. II, p192n, cf. p44n. cf. Tipton, ibid., p237; K. Marc-Wogau, 'The argument from illusion and Berkeley's idealism', in Martin and Armstrong (eds.), ibid., (orig. *Theoria*, Vol.24, 1958).

(25) Tipton, ibid., p238.

(26) Tipton, ibid., pp39-40, pp236-240.

(27) Tipton, ibid., p238.

(28) ひと言の文を1つに分けたたる原文と訳が正確に対応しないが、これは支障なし。

(29) 神が我々の観念を生み出したるの「道徳」である(iii, 217-19)。

(30) cf. P.D. Cummins, 'Berkeley's likeness principle', in Martin and Armstrong (eds.), ibid., (orig. *Journal of the History of Philosophy*, Vol. 4, 1966)

(31) 「ある起りや (occasions)」 ある「語」の知覚の因果説的意味はない。知覚された熱とそつてなご熱を区別しよへんやうべくべにわざ、「我々の語は可感的事物に関して進行してゐる」とハイロナスがそれを否定してゐる (i, 180) りかかる明るかだね。

(32) G.J. Warnock, *Berkeley* Peregrine edn. (London, 1969), p149.

(33) 『第一対話』 どう知覚の相対性に觸及するかが、それは、実在性を不变なものにはなく「ハヘハニ易く」、實際、変わり易く「観念」に歸る (iii, 258)。これを主張するためであり、「證明」のためではない。

(34) 『第一対話』 では、あなたの考へに従ふばかくかへの帰結になる、とこら形のハイロナスの發言が他の「一対話」に比較して目立つ (i, 179, 184, 189, 190, 197, 206; ii, 212, 225, 226)。その数と配置から、『第一対話』はハイロナス自ら何かを主張するふうである、相手を何か導く」とが基調になつてゐる事を窺わせる。

(35) *Works*, Vol. VIII, pp36-37.

(36) ベークニアロック的枠組 (the Lockian framework) の中で働くことである (Tipton, ibid., p85) である。

- (37) 「あなたに従えば事物の現れ (appearances) じゃ無い知覚の直接対象を私は実在物そのまへ (the real things themselves) と考える。」(iii, 244)
- (38) 「名前の限りない数と混乱が言語を非実用的なものとする」 わない様に我々無数の「可視的諸対象」をひくつの名前で呼んでゐるにあんな。(iii, 245)。
- (39) cf. Aschenbrenner, 'Bishop Berkeley on existence in the mind', in S. C. Pepper et al. (eds.), *George Berkeley: Lectures Delivered before the Philosophical Union of the University of California* (Berkeley, 1957), pp 45-46.
- (40) 特に N. T. V. § 44。
- (41) ベークリーが語って仮定しておいたところではなし。『視覚新論』(1709)が著される時点では『原理論』(1710)の内容が考えられておいたとは『哲学論叢』(1707-8)で明らかである。あくまでも「視覚に関する論議でそれを吟味し反駁する」とは私の目的であつたから。(§ 44) べつに仮定しておいたのである。「しかし、誰が『視覚新論』だけを読んで、ベークリーが第一性質から成る事物、おた、触覚器官によつて直接に感知される性質から成る事物の実在性を否定してみると推測したであつたか」 ふざけやうにアーヴィングは興味深々。 C. J. Sullivan, 'Berkeley's attack on matter', in Pepper et al. (eds.), *ibid.*, p24.
- (42) cf. Aschenbrenner, *ibid.*, p45.

付記 本稿は日本哲学会第十九回大会（一九八〇年五月二十一日、六月一日 金沢大学）に於ける一般研究発表に加筆したものである。

（博士課程学生）